

インターネット古書店・ほんのたまごミニコミ紙

miniたま (みにたま)

2019. 1 第98号

友禅小袖の水仙

2019年が明けました。「新年おめでとう」と言えばいいのか、今年5月の改元を見据えて「平成ありがとう」と言えばいいのか、迷う年明けとなりましたが、本年も何とぞご愛顧のほど、よろしくお願い申し上げます。

平成時代を回顧・総括する企画があちこちで見られます。読売新聞首都圏版朝刊では、昨年11月27、28日の2日間にわたって「平成時代 世論調査特集」が組まれました。

読売新聞が実施した全国世論調査による集計で、「平成を象徴する国内の出来事」として挙げられたのは①東日本大震災（平成23年）②オウム真理教事件（7年）③阪神大震災（同）④消費税スタート（元年）⑤福島第一原発事故（23年）が上位5件。

「平成で思い浮かぶ人物」として挙げられたのは①小泉純一郎（元首相）②安室奈美恵（歌手）③天皇陛下④イチロー（野球選手）⑤安倍晋三（首相）が上位5人。小泉氏は「平成時代で業績を評価できる歴代首相」でも、現職の安倍氏を押さえて1位になっています。

思えば平成は、大震災などの「災害」があり、スマホやインターネットなど情報通信技術の「進化」があり、バブル崩壊など景気の「低迷」がありと、様々なことがあった30年間でした。来たる新しい時代に期待したいと思います。

インターネット古書店
ほんのたまご



～ショップサイト再開のご案内～

休業しておりましたショップサイトを再開しました

ご利用をお待ち申し上げております。

ほんのたまごは文芸作品や、自然科学・人文・出版・社会・映画などの古書を販売するインターネット古書店です。

ほんのたまご

著作権は放棄していません
本紙に掲載されている画像・文章の
無断転載を禁止します

発行 インターネット古書店 ほんのたまご
メールアドレス nasuka@hontama.com
サイト URL <http://www.hontama.com>

たまたま本の話

第98回 2001年以降の10本はコレだ！ 21世紀外国映画ベストテン

クリント・イーストウッドとウディ・アレンとテオ・アングロプロスを外して21世紀外国映画を語ることができるか？そしてデイヴィッド・リンチもロマン・ポランスキーもクリストファー・ノーランも枠外に置いて。独断と偏見で選ぶ2001年以降の10本（順不同）。

①わたしを離さないで

監督：マーク・ロマネク 製作：2010年、アメリカ、イギリス
ノーベル文学賞作家、カズオ・イシグロが2005年に発表した同名のSF小説が原作。同じくノーベル賞を受賞したips細胞による先進医療が話題となっている現在、クローン人間による再生医療というテーマはやや古びたか？否——ここには人間以上に人間らしい心を持ったクローン人間たちによる人類愛という永遠の主題が息づいている。

②ナイトクローラー

監督：ダン・ギルロイ 製作：2014年、アメリカ
1970年代、テレビの過熱する視聴率競争を描く「ネットワーク」という映画が話題になった。現アメリカ大統領が一部メディアを「フェイクニュース」と名付けたように、21世紀ネット社会の報道競争はさらに過激になっている。事件や事故を追って一線を越えるジャーナリスト、ジェイク・ギレンホルムの怪演はまさに必見。

③幸せなひとりぼっち

監督：ハネス・ホルム 製作：2015年、スウェーデン
かつてスウェーデン映画は「神と悪魔」の問題を扱うことが多かった。この映画は、妻を亡くし職も失って、生きる希望をなくした59歳の偏屈で孤独な男の人生を描く。近所に越してきた

のはイラン人女性とその家族。完全福祉国家と言われ、社会保障の充実していたスウェーデンも、産業民営化と移民受け入れでずいぶん変貌していることに驚く。

④チェイサー

監督：ナ・ホンジン 製作：2008年、韓国
とてつもない暴力描写と、残虐シーンが続出するナ・ホンジン監督の長編デビュー作。2004年に韓国で起こった連続殺人事件をベースにしている。かつての儒教思想の国、韓国でも観客動員数が500万人を超えるヒット作になったという。21世紀の韓国映画には、他にも「息もできない」（2008年）など、あまりにも過激な秀作が多い。

⑤別離

監督：アスガル・ファルハーディー 製作：2011年、イラン
「コーランに手を置いて真実を述べよ」という映画の中の言葉が、イスラム教徒でない我々にも重く重く響いてくる。本作で第84回アカデミー賞外国語映画賞を受賞した監督は、第89回アカデミー賞でも「セールスマン」で同賞を再び受賞した。2回目の受賞では、アメリカの移民政策に抗議するため、主演女優らとともに授賞式への出席を見送ったのは記憶に新しい。

⑥バタフライ・エフェクト

監督：エリック・ブレス 製作：2004年、アメリカ
近年のカオス理論のひとつに「バタフライ効果」というものがある。力学系の状態にわずかな変化を与えると、そのわずかな変化が無かった場合とは、その後の状態が大きく異なってしまふという現象。まさにブラジルの1匹の蝶の羽ばたきがテキサスで竜巻を引き起こすようなストーリー展開に圧倒される。練り込まれた脚本が光る。

⑦わたしは、ダニエル・ブレイク

監督：ケン・ローチ 製作：2016年、イギリス、フランス、ベルギー

この映画を見ると、往年のアメリカン・ニューシネマの「怒れる若者たち」が、50年後の現在は「怒れる老人たち」になっていることに気づく。社会派の大ベテラン、ケン・ローチが「どうしてもこれだけは撮っておかねばならない」の思いを込めて作った1本。腕の良い大工が心臓病と認定され、仕事ができないつらさは、日本の労働者である我々も身につまされる。

⑧おみおくりの作法

監督：ウベルト・パズリーニ 製作：2013年、イギリス、イタリア
ヨーロッパ版「おくりびと」と言えればいいだろうか。監督、脚本のウベルト・パズリーニがガーディアン紙に掲載された「孤独死した人物の葬儀を行う仕事」に関する記事から着想を得て、ロンドン市内の民生係に同行し、実在の人物や出来事について取材を重ねた末に誕生した作品である。ここでは詳しく書けないが、奇跡のように美しいラストシーンに息を飲む。

⑨その土曜日、7時58分

監督：シドニー・ルメット 製作：2007年、アメリカ
多くの名作を撮り続けたシドニー・ルメットの遺作だが、遺作と呼ぶにはあまりにもエネルギッシュでバイタリティーにあふれた1本となった。父の愛情をめぐる出来の悪い兄と、出来の悪い弟のその後のドラマ。一口で言えば21世紀版「エデンの東」である。麻薬に溺れるフィリップ・シーモア・ホフマンの熱演は、やがて彼に実際に訪れる薬物中毒死を暗示していた？

⑩ファイナル・デスティネーション

監督：ジェームズ・ウォン 製作：2000年、アメリカ
最後にズルをする。本作は20世紀の製作だが、日本公開が2001年初頭なのでご容赦を。凄惨な飛行機事故を予知して搭乗を取り止め、いったんは死を回避した若者たちが、逃れられない死の運命に次々にさらされていく。「X-ファイル」「ミレニアム」の脚本家、ジェームズ・ウォンの劇場映画監督デビュー作。（こや）